

臨床看護における「援助距離」の研究

- 看護援助に求められる援助距離の統制を考える -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
中根 登代美

看護援助は、今日の医療の変化に伴う学習援助型の生活モデルによる、広範なプライマリーな関わりが求められ、Orem, D.E (1991: 邦訳, 1995) のセルフケア理論においても、看護実践とシステムとしての技術的操作の援助課題がある。この新しい要請にある看護は、本来、専門援助ゆえに患者との距離感を自覚することは少なく、その関係性の近さも周知されているが、困難さを感じる遠い距離感の援助関係では、場面や状況に応じた変動性から必要に応じて、自覚的に操作することが必要となる。

専門援助関係における距離感の問題は、看護援助の技術や知識に一定の示唆を与え、患者との社会的相互作用から、看護の職業的距離感を展望すると考える。

したがって本研究では、「援助距離」を『専門的援助に求められる看護援助に必要な距離の意識に付随した行動であり、専門性あるものとして状況に応じて可変し、かつ流動的であり、自ら統制できるもの』と位置付けた。

研究目的: 臨床看護において「援助距離」がどのように捉えられ統制されているかとし、経験知を考慮した主任看護師を研究対象にした。**研究デザイン**は、研究1は集合調査による内容分析、研究2は参与観察を含む、半構造化面接調査のGTAによる質的研究からの帰納的分析、研究3は観察場面からの事例研究とした。

結果: 研究1では「援助距離」は援助の困難性と何らかの関連があり、援助場面は生活・療養生活支援・精神的ケア・退院指導・家族援助であり、研究2では、面接カテゴリーは6カテゴリーと26のサブカテゴリー、観察では1カテゴリーと7サブカテゴリーが見出され、研究3からは、セルフケア援助の可能性が示唆された。

本研究の結論: 看護援助プロセスにおける臨床看護に必要な援助ツールとして捉えられていた。「対人距離」と同義で対話や関係性の相互作用に影響し、区別されずに近い距離の保持がある。「援助距離」の要因の1つは、対話の有無と援助困難性の関係があり、統制は経験知とキャリア発達にあると推測される。セルフケア看護支援の視点に、Orem看護論に基づいた「援助距離」を活用する一知見となった。

研究課題: 援助プロセスの時間軸や経験知等、援助範囲を選定した研究デザインが必要である。退院指導および「援助距離」の要因構造までは捉えられなかった。